
よく晴れた嵐の朝

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よく晴れた嵐の朝

【Nコード】

N1390R

【作者名】

どんぐり

【あらすじ】

文章作成に悩む少女のお話。

前篇

「あーっ！！！！！！！！！！」

叫んでみた。

「無理っ！もう無理書けない書きたくないもう止めたいっ！！」
喚いてみた。

「だったら止めれば？」

そんなわたしに、仁が冷たく言い放つ。

「んなことできるかっ！」

また叫んだ。何やってんだか。ほんと。

「はいはい。だったら大人しく書いてろよ。毎回毎回、どうして
そうなのかねえ」

「うっさいっ！黙ってろっ！」

なんて喚き散らした結果、本当に仁は黙り込んでしまった。自業自得とはいえ、本当に黙られてしまうとなんだか寂しい。もう少しわたしを構ってくれてもいいんじゃないかな？もっとわたしとコミニケーションとったって、別にあんたの損にはならないよ？

じとっ、とした目で見るも、仁はもうわたしのことなんてほったらかしで、自分の作業に入っている。自分の作業、すなわち写真の合成だ。

パソコンの画面に向き合って、ひたすら作業に没頭する仁の横顔が憎らしい。

「あー、もう。なんだってのよお。なんでわたしがこんなもんを書かなきゃいけないっての？わたしが何したってのお？」

今度は泣きごとを言ってみた。でも、仁はこちらのことなんて、花も葉も枯れ落ちた桜の木に向ける程にも注意を払わない。しょうがないか。自分が悪い。自分がヒステリックに泣き喚いているだけ。仁だって忙しい。締め切りは明日だ。

でもさあ、なんて言うの？けっこう付き合い長いんだからさ、ち

よつとはわたしの習性をわかってくれてもいいんじゃない？締め切りが近くなると、とにかく当たり散らしたくなるんだよ？別に解決策なんて提示しなくてもいいからさ、ちょっとわたしに構ってくれない？

そう思いつつも、わたしは何も言わない。そんな泣きごとを言うのは流石に気が引ける。

「あー」

もう一度意味のない声を漏らして、パソコンに向きあう。キーボードに手をおいて、とにかく文字を打ってみた。

『それは、よく晴れた嵐の朝のことだった。』

……ダメだ。末期だ。もう、日本語だって怪しくなってしまった。いったいどんな天気だ？嵐なのに、何をどうやればよく晴れた日になるって言うんだ？

一度気分転換が必要なようだ。ちょっと仁の作業でも覗いてみようか。

私は席を立て、仁の許へと忍び寄る。なんでわざわざ忍び寄っているかなんて知らない。ただの気分だ、気分。

せいぜい六畳程度しかない部室を覆う、誰が持ってきたのだからからないガラクタを掻きわけ、じりじりと仁ににじり寄っていく。

それにしても、このゴミ溜めの様な部室を掃除しようという、殊勝な輩はいないものだろうか？はつきり言って鬱陶しい。なんでこんなしょうもない怪獣のフィギュアがあるんだ？しかも大量に。何がどうしたのか、女児用おもちゃのお人形まで在る。この部室の住人はいったいどんな趣味をしているんだ？こんなじゃ、ここにいるわたしまで、このカオスワールドを作り出す特殊な趣味を持っているみたいじゃないか。私が持ってきたのは、せいぜいテレビの足元に鎮座しているシャチホコの置物くらいのものだって言うのに。静かに仁の背後に立ち、推理マンガならば全身黒タイツで覆われてしまうだろう雰囲気醸し出す。だが、誰も見ていないことにこんなことをやっても寂しいだけなのですぐ止めた。それにしても。

「はあー、相変わらずいい腕してるじゃないの」

感嘆の声を漏らした。それくらい、仁の写真合成技術は素晴らしい。接合面を上手いこと隠している。何をどうやるのかは知らないが、ここまで完璧にやるのは大変な作業だということはわかっていいる。入学から早一年半。こいつの作業を見てきたのだから間違いない。

「ってか、見てないで早く書けよ。間に合うのか？」

しきりにペンタブを動かして、画像編集を続ける仁。こちらを振り返りもしない。

もっとわたしを構ってよっ、と駄々をこねる代わりに、わたしは呟く。

「……知らない。そんなことわたしに聞かないで」

はあ、と溜息をつく仁。しかし、振り返りはしない。

「どれくらい書いたんだ？」

さあ、どれくらいでしようね？

黙りこむ私に、仁は続けて言葉をぶつけて来る。

「……まだ白紙か」

いや、白紙ではない。だって、さっき書いたのだから。

「違う。ちゃんと二十文字くらい書いた」

豪語するわたしに、呆れきった声。

「知ってるか？「財布の中身が二十円しかない」というのを、世間一般的には「お金がない」と表現するんだ」

知ってるわ、そんなもん。

「財布の中身と文字数は関係ないでしょうが」

「関係のないように見える所に、何かしらの関係性を見出すのが人間の仕事だ。そうやって科学は発展してきたんだぞ？知らないのか？そもそも科学という発明があったからこそ……」

あ、やばい。仁も末期だ。こんな風に謎の語りを始めたら、もはや仁は廃人寸前。きつと寝てないんだろなあ。なんだかんだで頑張るやつだから。

仁の作業を見つめつつ、滔々と語られるストーリーに耳を傾ける。世界の成り立ちがどうのこうの。ビッグバンがどうのこうの。マナの樹が炎上して火の鳥が生まれて更にはそいつに食われたいも虫が人間の先祖となって。

ああ、本当に意味がわからない。仁の壮大な夢物語に比べたら、「よく晴れた嵐の朝」が本当にありえる気がして来た。

「はあ。人魚、か……」

ディスプレイを見つめて呟いた。

ここはオカルト研究部。とはいえ、別にUFOが地球に残した痕跡を調べる、なんて非現実的なことをしているわけではない。

私たちの活動目的は、「オカルトにまつわる何かで人を楽しませること」だ。世界中からオカルト関係の情報をかき集め、真実の究明を目指す、なんてこととは全く縁がない。

『オカルトは人を楽しませるためにある』

決して人を惑わすためにあるのではない、と続く場合もあるが、ともかくもこれがオカルト研究部のモットーだ。このモットーがなんだか面白くて、特に入りたい部活もなかったわたしはオカルト研究部に入ってしまった。怪しげな部ではあるが、実際の活動はまったくそんなことはない。ここがちゃんとした部活として認知されているくらいだ。

このオカルト研究部は、その活動の成果を定期的に冊子にして発行している。その中で、時々テーマに合わせて何かしらの文章を書くのが、わたしの仕事。文章は、小説でもエッセイでも、論文でも構わない。とにかく、紙面を埋める文章を書けばいい。それで、今回のテーマは「人魚」。わたしは人魚関係の文章を書くことになっているのだが、どうにも文章が書けない。なぜだろう？

ちなみに、仁の仕事は表紙に使う人魚の画像作成だ。

ちなみのちなみに、わたしたち以外の部員だってちゃんという。原稿などの締め切り前は、家での作業が多くなったりして、今日部屋にるのはわたしと仁だけ、ということ。

それにしてもこの人魚は気持ち悪い。上半身が女性の水着写真。そのくせ、下半身は何処か熱帯で生育していそうな、巨大な魚の尾ひれである。なんだか脂っぽいものでギトギトしているし、砂をかぶっているし、鱗が所々剥がれてもいる。人魚の美しいイメージを覆す、とんでもない合成写真である。よくこんなものを作ったものだ。ちなみに、写真の女性の顔は、とある先生のを加工したもの。だが、その加工の巧みさにもはや原形をとどめておらず、逆立ちしようとも元が誰なのかわからない。

「もつと麗しの人魚さまを作ろうとは思わなかったの？」
まだ何かをぶつぶつと呟いていた仁が、わたしの声に反応して一度言葉を切った。よかった。まだ仁は理性を残している。

「そんなもの作って、このオカルト研究部にどんなメリットがある？ここはグラフィア写真をばらまく所じゃない」

ま、そうだけだね。でもさ、なんかもったいないな、と思う訳だよね。その技術でもっとひたすら美しい写真を合成して見ようとは思わないの？

この仁がそんなことをするわけがないと知りつつも、そんなことを考えてしまう。

わたしがもの思いに耽っていると、仁がペンを止めてデータを保存。作業中の画面を閉じた。

「あれ？もう終わったの？」

となると、まだ終わってないのはわたしだけ？

「いや、まだだ。でも、あと二時間もあれば終わる。ちよつと休憩だ。腹減った」

そういつて仁が席を立ち、大きく伸びをした。うーっ、と一仕事終えた人間特有の満足げな呻きを漏らす。憎たらしいくらいに羨ましい。こっちはまだ最初の一文すら書いていないというのに。

わたしがその背中を憎々しげに見やっていると、仁が伸びを止めてわたしのパソコンのある所へ向かった。まずい。あんな珍妙な怪文書を見せるわけにはいかない。

「あ、ちよっとっ」

引き留めようとして手を伸ばし、

「おわっ」

何かにつまずいてこけた。何かと思えば、某有名怪獣たちのフィギュアが詰まった段ボールだった。いくつかの不幸な怪獣たちが転げ落ちている。まったく、どうしてこんなものを部屋に残しているんだか。早く処分してしまえばいいのに。

「それは、よく晴れた嵐の朝のことだった」

あー、もー。わざわざ読みあげなくていいのに。

「なかなか面白い文章を書くじゃないか。続きが非常に気になるな」

にやけ面で皮肉を言われると、非常に不愉快である。

怪獣のフィギュアを元の段ボールの中に乱暴に投げ込んで、わたしは立ち上がる。

「うっさいな。勝手に見ないでよ」

わたしのノートパソコンの前に立つ仁が、こちらを向きもせず、画面を見つめたまま言う。

「それをいうなら、瞳だってオレの作業を勝手に覗くなよ」

パソコンの所へ行き、今更意味がないと知りつつも、乱暴にそれを折りたたむ。

「あんたはほとんどやる作業が決まってるからいいじゃないの。わたしのとは勝手が違う」

わたしの場合、文章を書くときは、その過程でとんでもない謎の一文が出ることが多い。さっき書いた奇天烈な天候もそんなもののうちのひとつだ。そんなものを人に見せるのはためらわれる。

「オレだって、作業過程を人に見られるのは好きじゃない。失敗してるところを見られるのは嫌だ、と思って緊張することもある。たったこれだけの作業にこんなに時間をかけているのか、なんて言われたりするのにも腹が立つ」

「わたしは失敗してるところみたってなんとも思わないし、そん

なこといわない。ただ感心してるだけ」

「それはそれで落ち着かない。期待に応えたいと思って無暗に肩に力が入るんだよ。やっぱり作業は一人でやった方が落ち着くんだ」いつも冷静に淡々と作業してるように見えて、案外平常心を保ててないのね。知らなかった。

「じゃあ、これからはこっそり覗くようにする」

推理マンガの犯人のように？それはなんだか怪しすぎるか。

「結局覗くのか。まあいい。もうすぐ下校時刻だろ。もう帰るか？」

時計を見た。午後七時十分前。この高校の最終下校時刻は七時。いったいわたしは何をしていたのだろう。まったく作業が進まないまま、三時間ほど過ごしていたことになる。

「ああ、もう。なんでわたしっていつもこうなるかなあ」

書きあげるのは、常に締め切りの間際。前日か、さらには当日だったたりすることも多い。

「そんなもんだろ。オレだっていつもぎりぎりだ」

仁が定位置に戻ってパソコンの電源を切る。それにならって、わたしも電源を切った。

「しかし、「よく晴れた嵐の朝」というのは面白いな。それで続きを書いてみたらどうだ？」

「これにいったいどんな続きが書けるのよ。別のやつ考える」

ごそごそと帰宅の準備をしながらも、適切な文章を考える。考えるけれど、どうしてもなにも浮かばない。

「あ、ちよつと金貸してくれないか？帰りに何か食いたいんだが、金がない」

金がないなら食うな、と言いたいが、わたしも何か食べたい。頭を使ったせいだろう。……たとえ何も書いていなくても、悩むのになってエネルギーは必要なのだ。

「わたしもいく。っていうか、この前貸した百円返せ」

唐突に、まだ返してもらってないことを思い出した。

「今度金を拾ったらな」

拾った金で返す気か。それじゃいつになるかわかったもんじゃない。

パチン、と電気を消す音がして、室内が一気に暗くなる。もう一度室内を確認して、忘れものがないことを確認。仁の後について部屋を後にし、最後に鍵を閉める。

「お金は明日返してね」

「ああ、無理。二十回払いで返す」

一日五円ずつか？百円を手に入れるより、五円玉を二十枚用意する方が面倒だ。

まあいい。こいつは借りたものはしっかり返すやつだ。気長に待てばいい。

それにしても、一キロくらいしかないのに、パソコンがなんだか重いな。文章を書くのに便利だけれど、こうやって持ち運ぶのはちょっと大変だ。

このパソコンを買った時のことを思い出す。その時は、やたらと文章を書くのが楽しくて、とにかくひたすら何か書いていた。それが今は、どうにも行き詰まる。文章を書くって、こんなに息苦しいだけのものだったっけ？

前篇（後書き）

読了、感謝します。続きも読んでいただけると幸いです。

後篇（前書き）

お付き合いくださり、感謝します。

後篇

帰宅してからも、ただただ時間が過ぎるだけでいい文章は浮かばない。いよいよやばいな、と思って突っ伏していた時、ケータイが鳴った。仁からだった。

「ひゃい？」

ひゃい？ ああ、声に出す言葉までおかしくなってる。

『なにが、ひゃい、だ。まだ行き詰ってるのか？』

「そうだねえ。一文目すら書いてない」

もっとも、大抵の場合、一文目を書いたら後はするすると書いてしまうのだけれど。……今回の珍妙な文章については話が別だ。

『しょうがない奴だ。まあいい。こっちは完成したから、パソコンの方に画像を送つといた。なにか文句があるなら聞く』

じゃ、つと言って電話を切ろうとした仁を引きとめて、わたしは尋ねた。

「仁ってさ、どうして合成写真なんて作ってるの？ 合成写真にだって、創作はけっこう過酷なことじゃない？」

切実な疑問だった。「もう本当に止めてしまいたい」。そんな考えが頭を駆け巡るくらい、本格的に行き詰っている今のわたしには。しかし、わたしの深刻さとは裏腹に、仁がごく当然のこのように言う。

『そんなもの、楽しいからに決まってる』

楽しいから？ それって、どんな気持ちだったわけ？

「そんなに楽しい？ 画像編集より、ずっと楽しいことは世の中いくらかでもあるんじゃないの？」

カラオケ、ボーリング、映画、旅行、ビリヤードなどなど。こっちの方がずっと楽しいじゃないか。こんなに苦労することもない。だっていうのに、仁は断言する。

『そんなものはない』

「……そうなの？」

『ああ、画像編集以上楽しいことはない。画像編集に比べれば、他の楽しみなんてただの前座、もしくは前菜だ』

随分とカッコいいことをいうじゃないか。

「まあ、仁は上手く行ってるからね」

軽い気持ちで言ったら、仁がひどく心外そうに溜息をついた。

『はあ？お前、それ本気で言ってるのか？オレだって上手く行ってるわけじゃない。散々悩んだうえで、ようやく何か出来るんだ。苦勞してない、みたいに言われるとすげーむかつく』

仁の苛立ちを含んだ声なんて、久しぶりに聞いた気がする。よっぽど心外だったのだろう。

「そっか……ごめん」

仁だって、相応の苦勞をしている。仁が三日間の徹夜で倒れたとき、介抱したのはわたしじゃないか。

『ともかく、なんか書け。期待してる』

それきり、仁は電話を切った。もう十一時だし、眠かったのだから。

はあ。期待してる、か。そう言ってもらえるのはうれしいんだけど、その言葉はかなりプレッシャーなんだよね。期待に応えなきゃ、と思うと、なかなか筆が進まない。

ともかくも、わたしは文書作成画面を最小にして、メールを確認。仁からのメールを発見して、添付された人魚の画像を開く。

「変なの」

それはとてもおかしくて、自然と頬が緩んだ。ほんと、あいつはいい腕をしている。いいなあ。わたしも、これくらいの実力があればなあ。

「うん。文句なし」

誰にともなく呟いた。

ちょっとした息抜きに、今まで仁が作ってきた数々のでっちゃんあげ写真を順に見ていく。人面犬、だいだらぼっち、河童、天狗、鶴、

雪男……。割と有名な妖怪たちだ。他にも、グレイタイプの宇宙人からツチノコまで、その数は三十数枚に及ぶ。たいしたやつだ。この技術を、もっと感動的な画像を合成する方向に向ければいいのに。きつと素晴らしいものが出来る。

惜しいやつ。

画像を閉じて、再び文書作成の画面へ。白雪の様に清々しい白さが目に飛び込んでくる。心が澄み渡るようだ。頭まで真っ白になる。……なんて考えている場合じゃない。

「あうああ」

頭を抱えて呻いた。

全く進まないまま、二時間経過。時刻は午前一時。

再びケータイが鳴った。今度はメール。相手は……。仁？まだ寝てなかったのか。

メールを確認する。

『パソコンにメール送った。見ろ。オレはもう寝る』

何のメール？そう思って、再びパソコンのメールを開いた。確かに、仁からメールが届いていて、画像が添付されている。件名は「よく晴れた嵐の朝」。本文は一行、「創作って、こういうことだろ？」。なんだそれ？

「……で、なんの画像？」

その画像を開いた。

「あ……」

思わず、声が漏れた。だって、それはあまりにも綺麗だったから。パソコンの画面が映し出したのは、空の写真だ。それも、ただの空の写真じゃない。いつだったか、テレビでこういった映像を見たことがある。

そう、これは雲の上。雲の上だからこそ、上空には何もない。ただ、澄み渡った空が広がるだけ。

水平線の向こうからは、眩しすぎるオレンジ色の太陽が昇ってい

る。おそらくは、朝。

地面に広がる、分厚い雲。しかし、空の上からは綿菓子のように白くふわふわで、その上に立ってはしゃぎ回ることだってできそう
だ。

「よく晴れた嵐の朝」

そう、これはそんなとんでもない矛盾を成し遂げる写真だ。雲の
下は嵐だとみなせばそうなる。

つーっ、と頬を何かが伝う。手を当ててみて、自分が泣いている
のだと気付く。思わず、涙が出たしまった。

「こんな画像も作れるんだ……」

もしかしたら、ただ何処かのサイトから引っ張って来ただけかも
しれない。でも、おそらくはそうじゃない。サイトを巡るだけなら、
最後の電話から二時間もおからないはずだ。

わたしのために、作ってくれたのだろう。連日の作業で疲れてい
るくせに。

「はあ」

うん。わかった。なんとかしてみせる。いや、なんとかなるとい
う自信ある。今なら書けると確信している。

さっきまでの陰鬱な気分が嘘のように吹き飛んでいる。今だった
ら空だって飛べるんじゃないかと思うくらいに心が軽い。

顔に極上の笑みが浮かんでいるのがわかる。気分の高揚が、体を
否応なしに突き動かしている。

「ああ、もうダメ」

我ながら気色の悪い呻きを漏らす。

画像を閉じて、文書作成の画面へ。手が、キーボードの上で踊る。
今ならば、どれだけでもアイデアが出る。思考の速さに手が追いつ
かないくらいだ。

書きたくて、書きたくてしょうがない。
興奮し過ぎて、今夜は眠れそうにない。

『創作って、こういうことだろ?』

夜明けとほぼ同時に小説が書きあがって、わたしはその言葉の意味を考えた。仁はどういうつもりであんな言葉を書いたのだろうか? ぼんやりと考えつつ、一作書きあげた後の達成感の余韻に浸っていると、ふとひらめくものがあつた。そうだ。まさに、創作ってこういうことなんだ。

はちゃめちゃに荒れ狂った下界とは裏腹に、その天上は痛快なまでに晴れ渡っている、よく晴れた嵐の朝。

創作する時の思考の過程は、今にも自我が崩壊しそうになるくらい荒れ狂っていて、辛くて辛くてしょうがない。でも、いったんきつかけを掴んで登りつめてしまえば、それはもう、言葉では表せないほどに清々しい世界が広がっている。狂わんばかりだった時のことなど、一瞬にして消し飛んでしまうくらい、その光景は感動的だ。

『そんなものはない』

仁の声が蘇る。

画像編集より、ずっと楽しいことは世の中いくらでもあるのではないか。そう問うた時、仁は迷わずそう言った。その意味が、今ならわかる。いや、思い出した、と言う方が正しい。わたしだってそうなんだ。文章を書くより楽しいことなんて、ありはしない。

カラオケ? ボーリング? 映画? 旅行? ビリヤード? はは。そんなもの、確かにただの前座だ。確かに楽しいが、今以上の喜びなんて与えてはくれない。疲れ果てるまで踊り狂ってやりたくなるような、そんな気分の高揚なんて与えてはくれないのだ。

文章を書き始めたころのことを思い出す。

自分の想いを書いていくということがとても楽しくて、ひたすら何かを書き続けた。

一つのまとまりを作ること達成感を覚えて、わたしはその達成感にさらに突き動かされた。

いつしか、自分の文章を読んで面白いと思ってくれる人が現れた。「面白いです」。そういわれるのが、どうしようもなく嬉しかった。

初めて面白いと言ってもらえたときには、本当に体が震えて、何も手につかなくなるくらいだった。その気持ち、またわたしを加速させた。

書いていくうちに、面白いものを書かなければという気持ちが邪魔をしたり、ちよつとした倦怠期を迎えたりして、文章を書くことが難しくなることはある。でも、やっぱり最高の気分を味わえるのは、そういった困難を乗り越えて、何かを書きあげた時だ。

ほんと、こんなに楽しいことは他にない。

「うん。面白い。こんなもんが書けるなんて羨ましい」
わたしの書いた小説を読んで、仁が感慨深げにそう言った。

「あー、よかった。じゃ、わたし寝るわあ」

ふあー、と欠伸をして、机に突っ伏した。そのまま速やかに眠ろうとしたところ、仁が頭を叩いた。痛いなあ。

「なによう」

「なによう、じゃない。登校直後に寝るとは何事だ。ちゃんと授業受ける」

あー、そんな親みたいなこと言わないでえ。

「……眠い」

目をこすりこすり、呟いた。本当に眠いのだ。

「気合いで起きろ。気合いで。お前が眠っていると、オカルト研究部が責められるんだからな。学生の本分は勉強です、とか。授業なんて聞かなくてもいいから、起きたふりしとけ」

起きてるふりをするなら寝てもいいの？

仁の言葉をちよつとだけ不審に感じながらも、わたしのせいでオカルト研究部の評判が下がるのはいただけないのでなんとか目を覚まそうと思う。

「あの画像は役に立ったか？」

仁が思い出したように尋ねてきた。

「ああ、まあね」

「よし。だったら、昨日の分も含めて借金は帳消しだな」

何を言っているのだこいつは。

「はあ？ ふざけないで。それとこれとは別物。さっさと返せ」

ち、と舌打ちして、仁がしぶしぶしぶと言った感じで借金を返還。

「あ、でもさ、またあんな写真作ってよ。妙ちくりんな合成写真だけじゃなくて」

そう言ってから、いや待てそんなことになったら大変だ、と自分に言い聞かす。あんな感動的な画像を見せ続けられたら、わたしはどうなってしまうだろう。まさかとは思うが、でも、ねえ？ 未来がどうなるかなんてわからない。特に、こういう関係に関しては。

「ま、お前が「作って欲しい」っていうんなら、また作ってやらないでもない」

「いや、やっぱり……」

作らなくていい、と言おうとして、でも言葉が続かなかった。あんな写真を、見たくないわけじゃない。むしろ、もっとたくさんみたい。もっと。もっと。

「やっぱり？」

「……いや、なんでもない」

結局そう言ってしまった。将来が不安だ。本当に。

「お、先生がきたな。じゃ」

仁が原稿を置いて去っていった。その背中を、何故か見送ってしまった。そんなこと、する必要もないのに。

はあ。まさか、わたしと仁が？ いやいや、ないでしょ？ うん。ない。

そう自分に言い聞かせて、ノートを取るふりをしながら自分の書いた小説を読み返す。一晩で書きあげたものだから、それほど長いものじゃない。そもそも、紙面にもスペースは限られているからそう長い文章は書かなくていい。

しっかしなあ、わたしもよくこんなものを書きあげたものだ。

人魚を題材にした、ラブ＆ファンタジー。それはあまりにも綺麗過ぎる物語で、後で読み返すとちよつとどころじゃなく恥ずかしい。今からなんとか書きかえられないかと真剣に考えてしまう。

でも……。仁は、面白い、と言った。だったら、わざわざ書きかえることもないのかもしれない。どうだろうか？仁の意見だけで物事を判断するなんて、統計学的に間違っていると思う。……：そういえば、初めてわたしの書いた文章を面白いと言ってくれたのは、仁だったな。

ま、いつか。このままです。

原稿を机の中に突っ込んで、黒板の前に立つ先生を見る。でも、話は全く頭に入っていない。やばい、眠い。

気合いでなんとかしようと思えるが、なんともうまくいかない。周囲に視線を彷徨わせて、わたしのようすを観察していたらしい仁と目があつた。

どき。

心臓が鳴って、目が覚めた。なんで？

深くは考えず、ともかくも授業に集中する。集中する。集中する……。

あーもー。なんで仁の顔ばっか浮かんでくるかなあ。っていうか、画像編集は仁の得意分野でしょ？わたしはそんなことしなくていいんだってっ。

何かのリミッターが外れてしまったらしい自分に向かって、わたしは声を出さずに叫んだ。

あの空に仁の姿なんて合成しないでいいってばっ！

後篇（後書き）

読了、感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1390r/>

よく晴れた嵐の朝

2011年10月8日19時16分発行